資料4

「志を持ち、未来を切り拓く、ちばの子供の育成」に関する主な意見

１　確かな学力

○　現状・課題

・　学校教育には、幼稚園、保育所から小学校、中学校、高校、大学と学校段階があるが、学校間の接続と教育内容の一貫性に難点があるので、学校教育について、各学校段階のそれぞれの良さが生きると同時に、各学校を通じた目標、あるいは重点事項を示した方がいい。

・　諸外国の若者に比べて、日本の若者は自分を肯定的に捉える割合が顕著に低いと言われている。日本の若者のうち、自分自身に満足している割合は５割を切っている。自信が持てない、居場所が見つけられない、うまくいくかわからないことに対して意欲的に取り組めない、悲しい、憂鬱だと感じるという若者が７割を超えている。

・　日本の子供は、特に１０歳ごろから自尊感情が急速に低下していくという傾向も、海外の子供たちとは違う点だと言われている。

・　科学技術の加速度的な進歩を踏まえ、地球的規模に至る諸々の困難な課題に対して、問いを立て、得られた情報をもとに解を出していく、能動的で創造的な人材の在り方を探究していく必要がある。

・　ＡＩが進歩して社会が変わっても、ＡＩが人間に取ってかわることができない領域、例えば、ホスピタリティ（おもてなし）、マネジメント（人事管理）、クリエイティビティ（創造性）、モラリティ（道徳性・倫理性）、さらにＡＩが進むと情報倫理などに関する職業に従事する人材の育成が必要である。

・　ＡＩとかロボットが活躍する社会において必要な資質・能力は何かというと、情報活用能力やコミュニケーション力であったり、あるいは人間性・ヒューマニティーがこれからも大切になると思う。そこをきちんと育てる教育がこれからますます必要になる。

・　今までは知識を集約したタイプの学力というものが注目されてきたが、これからは脱知識集約型、いわゆる非認知的能力を学校教育で醸成する必要がある。

・　予想もしなかった事態に直面しても、子供たちが解決策を他者と一緒に練り上げたり、新たな価値を創造したりするためには、学校教育の中で、子供たちにレジリエンス（打たれ強さ）を育てることが大事である。

・　主体的に課題を発見して解決する力、創造力、発想力、他人と協働するリーダーシップ、チームワーク、コミュニケーション能力、豊かな感性、多様性を尊重する態度など、21 世紀のグローバル時代に必要な資質や能力を高める教育を追求すべきだ。

○　学力向上

・　国の力を示すのは、軍事力や経済力、人口が多いことや幸福度でもなく、やはり国民の知性の総量である。いつかは世界一になってもらいたいし、その始まりが教育である。

・　現代のような変化が激しい時代には、主体的に学習する意欲や、それを可能にする資質・能力が、社会の荒波の中でサバイバルするための必須のツールになってきている。

・　学習者の自己肯定感、動機づけに留意することは重要である。学校や大学を卒業した後に自分で学習をするという時には、この感情的な要素、つまり自己肯定感や動機づけが特に大事である。

・　学習心理学の知見からは、学習活動への肯定的感情の経験が学習への強い動機づけになり、反対に、否定的感情の経験があると学習は妨げられ、子供は学習を避ける傾向になるとされている。

・　自己決定的な成人学習者が成人学習の前提で到達目標であるとすれば、できるだけそのような学習者像に近づくように、学校教育においても、子供が主体的に学び、将来において自己決定的に学習ができる学習自律性を身につけられるような教育内容や方法が望まれる。

・　学習を行う意欲や内容の差が将来の雇用の確保や維持、人生の豊かさの差になるとすれば、子供たちの将来の保障のために、学校教育では卒業後、必要に応じて自ら自己決定的に学習を行い、自分で学習を律することができるといった資質・能力を子供たちに身につけさせた上で社会に送り出してほしい。

・　教師と親は本人が望む望まないにかかわらず、子供にとってのロール・モデル（役割モデル）である。学校で言うと、そのロール・モデルがしっかりしていないと、いくら教材やカリキュラム改革を行っても、それだけでは望ましい教育効果は得られない。

・　親と学校の先生が楽しみながら人生を送り、子供たちとともに学ぶことが一番重要で、子供たちへの学びのインパクトの大小は、それに比例するような気がする。

・　今までの授業のほとんどは、知識・技能を与えるところで終わっていた。試験でも、知識ばかりが強調されてきた。しかし、知識は幾らあっても自信につながらないので、基本的には、知識を活用する思考力・判断力・表現力というところに重きを持っていくことが大事である。

・　「楽しい」「喜び」に満ちた社会の創造には、セルフエスティーム、自己肯定感を高めることが大切ではないか。ありのままの自分を受け入れる、他人と協調できる、様々な困難を乗り越えることができるという時に、セルフエスティームはすごく大切になってくる。

・　今、学習指導要領全てがアクティブ・ラーニングの方向である。外国語だけでなく、全ての教科において何を知っているかでなく、何ができるかということに移行している。

・　小学校は、非常に積極的に子供たちも発言するし、先生が押さえつけずに自由にやらせている。ところが、中学、高校になるに従って、決まりがあるような気がしてならない。先生は最初から答えを全部持っていて、そこから外れたことを言ってはいけないような何かがある気がしてならない。

・　子供たちは大変優秀だが、自分の意見が述べられない。それはマニュアル文化の弊害ではないか。自分の意見をちゃんと述べることがまず必要ではないか。

・　学びの場の設定を与えるだけで、子供たちが自分たちで気づきを得て、そこから考えて行動を変えていく。教員に求められていることは場の設定をして、子供たちからそういうもの引き出して、それをうまくファシリテートすればいいのではないか。

・　長所ではなくて欠点を探す、いいところを誉める前に欠点を直そうとする文化が非常にあるので、子供たちも自信を持つ前に自分の悪いところに気がついてしまう。だから１０歳ぐらいになって、周りの顔色を見るようになると、そこから自己肯定感が急降下していく傾向があるようだ。

・　役割遂行など、子供たちが自信を持てるような体験や経験に基づくプログラムを教育に入れて、自分で気づかせることが必要である。また、子供たち一人一人が一個の人間として尊重され、大切にされているという意識を持てるように、教員が対応することが大切である。

・　全国学力・学習状況調査の結果をみると、千葉県が必ずしも全国平均を上回っていないことがわかった。意外な感じがしたので、その背景をよく探る必要がある。

・　文部科学省が実施する全国学力・学習状況調査をはじめ、種々の学力テストはデータの取り方、２次分析の在り方、その結果分析の学校現場での活用の在り方も、相当問題があると思う。もう少し現場に役立つ形の分析の在り方を検討してほしい。

・　現場で子供たちの成長にどのように反映し、役立てられているのか、明らかにしてほしい。

・　人生の目的や働き続ける意味は、最終的には幸福になることである。ウエル・ビーイング（主観的幸福感）をどのように高めるか、学問的な対象として研究すべきである。

○　学習環境

・　千葉は首都圏にありながら、非常に自然が豊かで、山もあり、川もあり、そして海もある。そうした「自然」が非常に魅力的である。千葉の自然を生かした教育を計画に盛り込めないか。

・　協働学習や調べ学習、サービスラーニングなどの積極的に学習に参加し能動的な探求を行うような学習を通じ、生徒に対し、自分自身で学習を構成し自分が中心のプレーヤーとして成長しうる学習環境を保障することにより、学習者が自分で学習時間を管理し、目標を設定でき、学習への動機づけを大事にするようになる。

・　学校教育においては、好ましい環境、子供たちが楽しいと思えるような環境を保障した上で子供たちに学習活動を促すことが、知識の効果的学習に非常に重要である。さらには、子供たちに情動コントロールを促すことが学習を効果的に行うことにつながる。

・　地域には文化的コモンズと言われるような文化拠点、ＮＰＯ、図書館、地場産業など様々な地域資源がある。このような資源を利用した学習、あるいは、自然体験などから、知恵に関わる知識が獲得されることが多い。

・　知恵に関わる知識では、現実社会における学習、つまり、千葉の地域資源の活用、現実社会での学習機会、経験資本と言われるような様々な経験の機会の蓄積などが効果的である。これらのことが子供たちの将来において、主体的で必要に応じて自己決定的に学習できる基礎となる学習経験になる。

・　学校のレディネスの差ともいえる学習者の特性に応じた四つの段階は成人だけの話ではなく、小学校、中学校、高校の子供に対しても、状況に応じた支援が必要なことを示唆していると言えるかもしれない。

・　学習者の特性に応じた学習支援については丁寧に議論し、どのような制度に落とし込めるかを考えていく必要がある。

・　ただ見たものだけではなくて、自分の五感を使って感じたこと、考えたことは、深く定着すると思う。体験を通した学習を大切にし、自分ごと化していくことが必要ではないか。

・　千葉県内の様々な自然や豊富な人的資源を活用して、千葉県の子供たちに必要な資質・能力を身に付けさせる具体的な施策を、是非強く打ち出して、計画に丁寧にまとめてほしい。

・　例えば、メディアリテラシーやプログラミングなどは、千葉県はＩＴ関連企業が多いので、先進的な取組ができると思う。科学についても、大学や研究機関が多いので、一層多くの学校で研究者と子供たちが関わりながら課題研究などを進めるべきである。

・　問題解決社会の教育ということを掲げ、産学官連携などいろいろな立場の人がつながりながら、千葉県のリソースを最大限生かして、子供たちに豊かな教育環境を提供し、全国のモデルになるような教育を推進してほしい。複数学年で関わりながら実際の地域課題、例えば人口減少への対応などの課題解決を目指す学習を推進すべきである。

・　社会の変化が激しいので、同時並行的に、それぞれの学校、地域ごとに、千葉県にある様々なリソースを生かして、多様な主体と連携しながら、多様なアプローチで、新たな教育の取組をし続けることが重要である。

・　授業を創り、授業を良くしていくためには、教員が協働で授業を研究する体制づくりが必要である。そして、この体制づくりを、自治体がどのように支援するかが大きな課題である。

・　学校で、もっと子供を図書館、博物館、公民館に連れていってほしい。子供たちが、地域の教育資産を知るという意味でも大変意義がある。県内にある教育的・文化的な施設を最大限に活用するために、連携した取組をしてほしい。

・　幼小中の接続を明確にする。それぞれがお互いの教育課程を知らない。例えば、小学校の算数部会の教員で数学の教科書を読んでいる人は１割。中学の数学専科の教員で算数の教科書を読んでいる人は３割にとどまる。

・　農業県千葉の強みを学校教育の分野においても生かし、活用を図るべきである。農林水産業を第６次産業として捉えるとともに、イノベーションを生み出す人材の育成を観点に、学校教育とのコラボレーションの可能性を探ってほしい。

○　読書活動

・　読書日本一の県になっていてほしい。そのためには、学校図書館の充実、学校図書館の運営の改善、読書指導の推進に、小中高を通じて、取り組んでほしい。そして、学校図書館をできれば地域にも開放して、公共図書館との連携も含めて、学校図書館が千葉県の教育の一つの大きな特色になってほしい。

○　ＩＣＴの活用

・　学生の学び方も変わってきている。板書はスマホで撮影し、わからない言葉は携帯に音声入力して即座に答えを得る。そのように学び方がどんどん変わってきている状況に対し、我々教員が対応していけるかどうかが重要である。

・　船橋市内、八千代市内の中学校では全教室に電子黒板が入っているが、高校には何もない。電子黒板、プロジェクターさえも、その都度持ち運ばなければいけない。県立学校におけるＩＣＴ環境の早急なる整備をお願いしたい。

・　ＩＣＴ環境の整備とあわせて、指導者の研修充実が大きな課題の一つである。最先端をいくべきである総合教育センターの機器も、大分年季が入ってきているので、県立学校とあわせて整備をお願いしたい。

・　ＩｏＴ、ＡＩ、ビッグデータは今までとは全然違う形で人間の生活を豊かにする可能性はあるが、同時に、それを適切に使う能力を身につけない限りはとても危ない社会ではないかと思われる。直接人間と関わらなくても、ＳＮＳの情報だけで暮らしていける可能性もある。

・　千葉県の学校が、情報化への対応や情報活用能力の育成に最も取り組みが進んでいるようになってほしい。そして、プログラミング教育をはじめ、教育におけるＩＣＴの活用にも積極的に取り組み、ＡＩ社会を生き抜ける子供を育てる教育を推進してほしい。

○　幼児教育

・　少子化対策の場合は、教育の充実が重要な施策になる。子供の数が少ないがゆえに、いかにコンピタンシー、能力のある、人間力のある子供の数を増やすか、有能な子供をいかにたくさん育てるかが重要になってくる。だから、幼児教育にもっと資金を投入した方が、教育効果や経済効果が高いといえる。

・　対人関係的な能力や人格特性・態度などを含む人間の全体的な能力、非認知的能力の基礎を養成するのが、小学生の低学年、あるいは就学前だと思う。学力だけでなく、そのような非認知的な能力も含めた指標を千葉県が最初に導入すべきである。

・　就学以前の幼稚園、保育所の段階から、公的なセクターで乳幼児の教育的なケアをしていくことが子供の成長にとって不可欠である。

・　乳幼児期の子供には、保育所や地域の中で、親と保育士・幼稚園教諭が一緒になって、子供の生活習慣について目標をつくる。そして、あまり無理なことは言わないで、できるところから取り組んでいくことが大切である。

２　豊かな心

○　道徳教育

・　道徳の教科化にとって非常に重要なのは教員の意識改革だと思う。教員が道徳の教科化に対して非常に不安を感じているのは、道徳自体の妥当性や有効性に疑問を感じているためである。本当に自分は道徳教育を担当できるのだろうかと不安を抱えているのだと思う。

・　道徳の授業での「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が、道徳教育を負のスパイラルから正（プラス）のスパイラルに変える。授業改善が道徳教育の改善の中核である。

・　校長の方針の下に「道徳教育推進教師」を中心として一体的に道徳教育を進める体制づくりが必要である。特に、「特別の教科」としての道徳科だけでなく「総合的な学習の時間」や「特別活動」などが一体的になって力を発揮できるように、道徳教育をカリキュラム・マネジメントすることが大切である。

・　担任の指導を原則としながらも、中学校段階では「ローテーション授業」を実施することで一層道徳教育の充実が期待できる。

・　新学習指導要領では、道徳的実践力の育成が求められている。そのためには、例えば、感謝の気持ちを伝えるにはどのようなコミュニケーションをすべきなのか、実践的なコミュニケーション・モデルを示し、反復練習して身に付けさせるところまで授業で踏み込む必要がある。

・　教科道徳の目標に示されている「道徳的諸価値を理解させる」は指導内容であり、「物事を多面的・多角的に考える」は指導方法である。したがって、多面的・多角的に考えさせる前に、まず道徳的諸価値を教える必要がある。

・　トルコのエルトゥールル号遭難事件など心温まる歴史的事実を道徳教育で紹介して、それが現代の我々にまでつながっていると感じさせるような、現実感を持たせた教材開発を行うべきだと思う。そうすると、非常にインパクトのある道徳教育ができる。

・　道徳教育については、社会の様々な事例に結び付けた道徳教育を一層推進してほしい。多様性や社会的包摂を志向することで、いじめ防止にもつながる。千葉県はいじめ防止については最先端の体制をつくることができる。実際認知件数は全国一位である。これは誇らしいことだと思う。

・　教科化され教科書を用いる新たな環境の中でも、子供のアイデンティティを育てるために、今まで以上に千葉県の地域性にこだわって、郷土教材を開発していくことが大切である。

・　道徳の到達目標は、千葉県の子供が、まず千葉県をよく知って、次に千葉県を好きになって、千葉県を良くするような行動を起こすことである。つまり、まず徳目を知って、共感し、実践に移すことが大切である。

・　千葉の郷土史の中に、道徳の教科書に記載すべき道徳的史実や物語がないか、発掘してみてはどうか。例えば、メキシコのサン・フランシスコ号の遭難事件での住民たちの献身的な救助活動が、その後の、国家間の国際交流にまで発展している。道徳的史実の好例である。

・　心温まる歴史的事実を紹介する道徳教材を使うことで、子供たちが国だけではなく、千葉を好きになって、それをまた自尊心の礎にしてほしい。

・　現代の心理学の分野には、特に人間の心理と主観的幸福感を学問的対象とするポジティブ心理学のような学問もあるので、このような学問的成果も道徳教育へ応用できる。

・　千葉県が道徳教育に本当に力を入れている県になっていてほしいと思う。そのためには、小学校、中学校、高等学校と、子供の発達段階に応じた道徳教育をためらわないで行ってほしい。そのことが千葉県、ひいては日本の品格につながる。

・　高校段階での道徳教育は、今後は科目「公共」が入り、「倫理」とともに担当教員がきまり、一部の教員に絞られてしまうことが課題にも感じる。「総合的な探究の時間」なども含めて、高校の道徳をもう一歩進めるときが来ている。千葉県が作成した読み物教材や映像教材を改訂し、一層の充実を図ってほしい。

・　もう一度改めて高等学校における道徳教育の充実を考える必要がある。道徳教育の実態を見ると、小・中・高と学校種が高くなる程薄まっている。高等学校なるがゆえの手だてを考えなければいけない。

・　道徳教育は分かれ道に立っている。道徳が教科化されて教科書を皆が使うようになるよさはあるが、授業が一層硬直化する面もあるのではないか、教師誘導型の授業で、子供が道徳を嫌いになるのではないか、懸念している。

・　道徳の時間が「特別の教科」として位置付けられた背景には、一つは子供の心の問題がある。子供たちの自尊感情が低いこと、孤独感や疎外感を強く感じる傾向があること、いじめの認知件数が低年齢化・最多更新していることが背景にある。もう一つは、道徳授業の実施実態に忌避傾向、軽視化傾向があり、道徳の授業に硬直化傾向があることがあげられる。授業が全国的に硬直化の傾向を見せており、このことは千葉県も例外ではない。

・　子供たちに、生き抜く力やコミュニケーション能力を育成するためには、今回の道徳の教科化は、様々なものを総合して自分で考える、自分で判断する力を身に付けさせる大きな鍵になると感じている。

・　道徳教育を行う上で制度上の問題がある。教員免許法によると、大学４年間で道徳に関する科目は「道徳教育の指導法」の２単位で、90 分×15 回だけである。また、この科目は小学校及び中学校の道徳教育を主な対象にしており、高等学校の免許状を取得するためには、この２単位さえ必要としない。さらに、道徳・倫理の専門家がいない大学もあるため、専門外の教員が、「道徳教育の指導法」を教えている状況がある。

・　教員採用試験に道徳教育に関する問題が出ていない。そのため、高等学校の教員は、個人で自主的に学ばなければ、道徳教育について学ぶ機会がまったくない。

・　道徳教育を担当する教員が知識、リテラシー、科学的・学問的な道徳教育学のバックグラウンドがあって教壇に立てるように、そして、子供の発達段階に応じて道徳教育をきちんと教えられるような教員養成を行うことが肝心である。

・　大学と行政がコラボレーションして教員養成のプログラムをしっかりと設計するなど、具体的な対策をとらない限り、実際の教育現場における道徳教育の実質化は進まない。

・　教員がしっかりした熱意と信念を持って道徳教育をしないと、どのようなすばらしい教材を使おうが、どのような教授法を用いて授業をやろうが、生徒や学生の心には響かない。

○　社会で求められる力

・　企業は個人の力に頼る面はありながらも、組織で動いていかなくてはならないので、「自分が、自分が」という社員ばかりではうまくいかない。周りの仲間をどう巻き込んで仕事をしていくのか、困った時にいかにその仲間を助けるのかということが組織の中では重要である。小さい時にしっかりした道徳教育や倫理教育を受けた方は、社会人になっても、そうしたところがしっかりできている。

○　心の教育

・　アメリカやイギリスでは、倫理研究や人格教育に学術的に取り組み成果をあげている。日本も道徳・倫理教育に積極的に取り組むべきである。

・　千葉県は「いのちの教育」を展開して８年が経つが、見直したほうがよいと感じている。「いのちの教育」に全てを含めようとして、硬直化している。柔軟に展開できる要素や資料、そして、人権をどう扱うか見直していくべきである。

３　健やかな体

○　体力向上

・　子供のソーシャルスキルの育成に身体活動とスポーツが非常に有効である。また、身体活動能力の高い子供はアカデミックな能力も高い。これらに相関関係があることも最近の大脳生理学の研究で明らかになっている。そういう意味では、今、なかなか厳しい状況にある。

・　スポーツインテグリティ（スポーツの教育性・健全性）を子供たちに教育することを考えると、体育科教育、あるいは教科体育だけでは無理な話である。教科道徳や総合的な学習の時間を活用しながら、スポーツインテグリティの問題に踏み込み、子供たちの認識を高めることが必要である。

・　運動部活動のガイドラインを遵守して、学校における働き方改革を進めるとともに、競技力を低下させないためには、指導教員がスポーツ医科学について研修したり、指導法を再度見直したりして、指導力の向上を図ることが大切である。

・　幼児期の子供がきちんと運動できるように、保育者の資質能力の向上が必要である。また、小学校、中学校、高校では、スポーツ指導者や運動部活動の指導者の人材育成が必要である。

・　多くの高校生が国体等で活躍し、優秀な成績を上げている。そのようなスポーツで活躍している高校生が、母校の小中学生を指導するなど、活用する機会や場をつくってほしい。

○　食育

・　千葉県の農産物やお米を積極的に給食の食材とするなど食育の充実を図るとともに、食物アレルギーの子供への対応など給食指導を行う教員の負担を軽減するための環境整備について考えてほしい。

・　子供たちの精神衛生と食生活は決して無関係ではなく、切れやすい子供や無気力な子供の多くが朝食抜きだと聞いた。給食はお昼だが、問題は朝食で、御飯朝食を導入してはどうかと思う。全校に導入するのは無理だとしても、モデル校を選んで、導入前後で学力調査の結果を比較するなど、子供たちにどのような変化があるか検証するのも面白いと思う。

・　学校給食を義務教育で100％実施するとともに、高校でも是非実施してほしい。さらに、朝も希望すれば食べる機会が与えられるようにして、千葉県の学校給食が日本一になればいいと思う。

・　お米と一緒に地元でとれる魚や地場産業の無農薬・低農薬野菜を給食に提供するなど、包括的な産学共同の発想を持って、給食を活用した食育による学力向上と将来の人材育成、そして千葉の地場産業の振興をセットで考えるような方策を打ってみてはどうか。

４　社会的・職業的自立

○　キャリア教育

・　千葉で育って、千葉で学んだ子供たちは是非千葉で働いてほしい。

・　今ある職業を念頭に置いてキャリア教育をしても、１０年後になると、その仕事自体がなくなっているかもしれない。今では、企業の寿命よりも人の就業期間の方が長く、自分のキャリアを自分で考える時代に入っている。

・　平成２３年の中教審答申では、体験活動は重要という側面だけを捉えてしまっているという見方も一部あった。なぜかというと、キャリア教育の捉え方が変化してきた経緯が十分に整理されてこなかったからではないか。

・　小中高のキャリア教育は、いわゆる出口をどうするかという議論から、その先まで見据える動きにシフトしてきているが、大学のキャリア教育は、いまだに出口をどうするか、首尾よく就職するにはどうするかにとどまっている。まずは、その変容が求められる。

・　キャリア教育が実施されて１９年たっているが、子供たちが実際に学びを積極的に楽しんでやるようになったかというと、学校の教育現場では、いまだに様々な問題を抱えている。例えば、中学校では、「学び」と「将来の仕事」にギャップがあってうまく結びついていないという指摘があり、高校ではインターンシップを実施している学校は少ない。

・　今のキャリア教育の現状は、当初（１９９９年)、中央教育審議会が提言したキャリア教育導入の目的や方針とはかい離したものになっていないか、今一度検証する必要がある。

・　一人一人が社会的･職業的自立を遂げ､この社会でちゃんとやっていくための力を育てること、つまり、ちゃんとした職業人になると同時に、家庭人や地域社会の一員等様々な役割、ライフロールを果たす上で必要な力を育てることがキャリア教育のベースである。

・　将来どのような選択をするか、どのような職に就くかということを考えるだけでなく、そこに就いた後で、様々な人間関係の中で仕事を遂行していく、あるいは、自分でできることとできないことを理解し､自分を律していく｡そして､見たことも聞いたこともない課題に出会った時に、ひるまずに果敢に挑戦し、みんなの力を借りながら対応していく、そうした幅広い力が必要である。

・　今学んでいることが自分の将来と関係していることを子供たちが腹落ちし、社会的・職業的自立に向けて必要な基礎的な能力を身につけていくことがキャリア教育の目標である。

・　子供たちに必要な資質･能力を育むためには､各教科等での学びが一人一人のキャリア形成や、より良い社会づくりにどのようにつながるのかを見据えながら、各教科等をなぜ学ぶのか、それを通じてどのような力が身につくのかという教科等を学ぶ本質的な意義を明確にすることが必要になる。今学んでいることと将来とをきり結び、そして、主体的に学んでいく姿がキャリア教育と重なるところである。

・　特別活動を要とするキャリア教育とは、総合的な学習の時間、学校行事、職場体験やインターンシップを通したキャリア教育について、普段の学習と自分たちの生活が結びついている、相互に関連し合っているということを、学期に一度は、学級活動やホームルームなどの特別活動の時間に振り返ろうということである。

・　第２期計画の施策４「社会的・職業的に自立し、地域で活躍する人材の育成」には、「子供たちが社会に目を向けながら、学校での教科等の学びと将来の職業との関係に意義を見出して、学ぶ意欲を持ち、日々学んでいることを将来社会で役立てるよう、しっかりと身につけさせる」とあるが、これは施策４だけではカバーし切れない。施策１「社会を生き抜く力を主体的な学びの確立」一体化して進めていくことが必要ではないか。

・　学習と社会性を重視しながら、今学んでいることが、どのように自分の将来と関わっていくかがメッセージとして子供に伝わっていなかったのは、受験のために学ばせてきた、あるいは、受験に合格する手段としての学びを強調してきたなど、学校の今までの長い慣行にあったのではないか。そうしたものが打破され、学びと社会とが往還していくことが必要ではないか。

・　学びに向かわせる時に、高校受験や大学受験などの脅し以外にも、方法はたくさんある。授業方法の改善や、学びの本質、アカデミックな意味での楽しさもそうだが、学びが社会に生きているということを地域社会の方々とともに伝えていくことは非常に重要である。

○　企業等との連携

・　中学、高校段階で地元企業の紹介や、県内企業の就職に向けた説明などを行ったり、インターンシップや企業見学等々で県内企業への関心を深めたりして、就職のミスマッチは避けるようにしていただきたい。

・　中学生の一日高校体験入学や夢・チャレンジ体験スクール、サイエンススクール、しごと体験キャンプ、子ども参観日、学校教育と連携した中小企業の発信事業なども「系統的なキャリア教育」の一環として捉え直されなければ、もったいない。

・　ＩＴ企業や社会起業家と連携して問題解決型のキャリア教育に取り組むことで、社会の問題を解決する仕事について実践的に学ぶキャリア教育ができる。

・　県立高校と中学校の連携、例えば、地域連携アクティブスクールと中学校が連携を深め、中学生が高校の特性をより深く理解して、社会とつながりながら学び、キャリア形成ができる進路指導に取り組んでほしい。